



かがみちゃん

信州の遺跡

第6号

本号では、平成25・26年度に発掘調査された遺跡の成果と、文化財を活用する博物館の取り組みや、近世城郭の史跡整備について紹介します。

最新調査成果から1

みしま 三島遺跡 (豊丘村)

遺跡の位置と環境

三島遺跡は、天竜川左岸の低位段丘上に立地します。平成25年度に豊丘村の住宅団地建設に伴い発掘調査され、縄文時代・古墳時代・平安時代の住居跡、中世以降の火葬墓などが発見されました。

完形の有孔罎付土器発見

縄文時代中期の竪穴住居跡からは、多くの土器が潰れた状態で出土しました。床面よりわずかに高い位置におよそ11個の土器がありました。竪穴住居跡の中央部には、倒立した状態で筒状

の深鉢形土器があり、その傍らに高さ30cm程の有孔罎付土器がほぼ正位の状態で見つかりました。有孔罎付土器は、小孔が開けられた罎がつく特異なかたちの土器で、土器の近くから焼骨片がみつかりました。

11個の土器は、多くが横になって潰れているにもかかわらず、有孔罎付土器と深鉢は、あたかも置かれたような状態で出土しました。このふたつの土器は、竪穴住居跡が廃絶したのちに、儀礼などの目的で置かれたものと思われます。

(豊丘村教育委員会)



有孔罎付土器 (左) と深鉢 (右)

おもがいこやがさわ 面替小谷ヶ沢遺跡(御代田町)

遺跡の位置と環境

面替小谷ヶ沢遺跡は、北佐久郡御代田町大字面替おもがいがいにあり、浅間山に水源のある湯川の河岸段丘上に立地します。

平成25年、滞在型市民農園の設置に伴って御代田町教育委員会により、A・B2地区の発掘調査が実施され、縄文時代中期後半～後期初頭の竪穴住居跡17軒、平安時代の竪穴住居跡4軒、縄文時代を主とする土坑86基が発見されました。

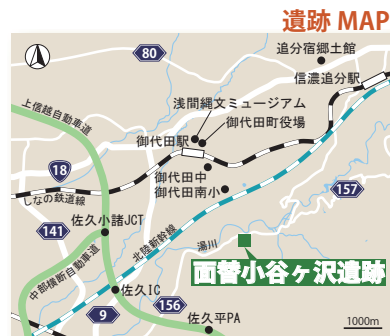
珍しいかたちの注口土器ちゅうこうどき

縄文時代中期後半～後期初頭(約4,500～4,000年前)の竪穴住居跡からは、蛇に似た把手を持つたいへん珍しい注口土器が出土しました。

この時期の土器の把手には、鳥や蛇を模したものが少数みられますが、この土器にもそそぎ口の反対側に蛇を連想させる把手があります。把手の



柄がついた鏡のかたちをした竪穴住居跡



(浅間縄文ミュージアム)

先には、目のような穴がふたつあります。水の神ともいわれる蛇のかたちの把手をつけることは、どのような意味があったのでしょうか。



遺跡遠景 (写真中央下：調査区)



注口土器
(赤丸印：そそぎ口)

ながの ぜんこうじもんぜんまちあと
長野遺跡群善光寺門前町跡
 (長野市)

■ 門前の町屋を探る

今回の調査地点は江戸時代の横町に位置しています。発掘では、石列を伴う溝で仕切られた江戸時代の町屋跡1軒分を調査しました。この町屋跡では、礎石や溝、木杭を使った地業（基礎工事）がみつき、地下室からは松代焼など幕末～近代



江戸時代の地業（基礎工事）



江戸時代後期～近代の町屋跡

の陶磁器が出土しました。弘化4年（1847）の火災による廃棄土坑は、赤い焼土で満たされており、陶磁器も熱で溶けたものが多くみられました。

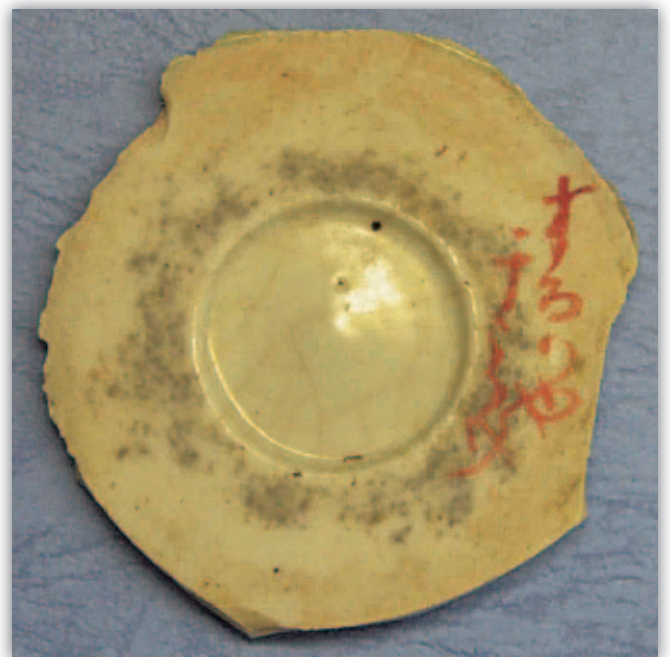


発掘では、江戸時代の陶磁器が多数出土しましたが、その産地は遠く九州地方の唐津焼・伊万里焼、北陸地方の越中瀬戸焼などが大半を占めます。これは長野県北部にある他の遺跡と同じ傾向です。しかし、長野県南部の遺跡から出土する陶磁器は、東海地方の瀬戸・美濃焼が大半を占めており、長野県の北部と南部では、遺跡から出土する陶磁器の産地が大きく異なります。江戸時代の北信地方へは、日本海を北前船で運ばれた品々が流通していました。

■ 商家の屋号

発掘では、「するがや」と朱書きされた幕末の陶磁器が出土しました。

明治25年に発行された商店の広告（「長野町勉強家一覧表」）には、「横町大門ノ入口 するがや支店」とあることから、調査地点が幕末の「するがや支店」と関係する敷地であった可能性があります。（長野市埋蔵文化財センター）



「するがや」と朱書きされた陶磁器

どうげん 洞源遺跡 (佐久市)

佐久地域で初めての平安時代の製鉄遺跡

洞源遺跡は、蓼科山麓から佐久平に向かって東北に延びる丘陵上に立地します。発掘調査は中部横断自動車道建設に伴って、平成25年度から実施し、今年度が2年目です。

調査の結果、佐久地域で初めてとなる平安時代(約1,100年前)の製鉄炉跡3基と焼土跡4基、中世の土坑などが見つかりました。

製鉄炉跡の発見

発見された製鉄炉跡は、丸い穴(深さ約15cm)から溝がのびたかたちで、長さが170cm前後です。表面は熱を受けて固く、赤く変色していました。内部からは鉄滓(かなクソ)や木炭、焼土塊が出土しています。

直径1m程の筒型の炉が想定され、炉に原料(砂鉄?)と木炭を入れ、高温で熱し、鉄滓を溝へかき出し、鉄のかたまり(鉄塊)をつくりだしたと考えられます。

平安時代の製鉄は操業ごとに炉を壊すので、発掘で確認できる製鉄炉の痕跡は、炉の底部(炉床)です。

製鉄炉横の作業場

製鉄炉跡の近くには、平坦に整地し、焼土や平安時代の



製鉄炉跡

(炉のまわりは焼けて赤くなっている)

土器(坏、長胴甕、小型甕)が出土しました。作業台として使われたと考えられる平石も出土していることから、製鉄操業時の作業場の可能性が推測されます。



炭化材の分布

製鉄炉跡のある北側の斜面では、長さ4m、幅1.5mの範囲で炭化物の分布が見つかりました。後世になって耕作などの造成で破壊されているため、分布範囲は、さらに広がると思われます。製鉄炉に入れる木炭の仮置き場とも想定されますが、今後、類例を調べ遺構の性格を検討します。

(長野県埋蔵文化財センター)



調査区の遠景(写真上は佐久盆地)

(○:炭化物分布範囲 白丸:製鉄炉 赤丸:作業場)



※踏み鞆は関東・東北地方の調査例を参考としました。

炉の操業想定図(左の写真と同じ方向から描いた図)

茅野市 5000 年

とがりいし
尖石縄文まつり

茅野市尖石縄文考古館

Tel.0266-76-2270

昨年は、10月12日(日)の秋空の下、約4,500人も参加者がありました。このまつりは、2000年のミレニアムと尖石縄文考古館のリニューアルオープンを記念して、市民の方がたを実行委員として委員会を組織しました。子どもたちが尖石遺跡の自然の中で楽しみ、縄文を体感できることをテーマに今年で15回を数えます。

縄文まつりは2日間にわたり行われ、初日は宮坂英式先生の業績を記念した「宮坂英式記念尖石



土器の野焼き

縄文文化賞」の授賞式と縄文文化大学講座、次の日は製作した土器の野焼き、火起こし体験、弓矢の製作など縄文にちなんだ体験型のイベントを行いました。特に、豚の丸焼、イノシシ汁、縄文アイスなどの食に関するものは、子どもから大人まで楽しめるイベントとして一番人気でした。今年も、終日縄文時代の雰囲気味わいました。

(尖石縄文考古館)



弓矢の体験

埋蔵文化財の新たな情報発信

～県庁ロビー展、「縄文人クロ」の活動～

長野県埋蔵文化財センターでは発掘調査した遺跡の最新情報を公開する目的で、長野県庁1階でのロビー展を行っています。今年度は、7月29日(火)の県庁見学イベント「夏休み みんなで学ぼうながのけん」に『夏休み 縄文人になろう』ブースを出展し、また11月17日(月)～21日(金)の生涯学習月間では、「長野県埋蔵文化財センターの業務と生涯学習」と題して、土器やパネルの展示を行いました。さらに、今年2月末には県庁ロビー展を行う予定です。

今回は、展示の解説、皆さまからの質問にお答えするために、はるか数千年前から時空を超えてやってきた「縄文人クロ」が登場。クロと対話をしながら展示品をみたり、本物の土器に触れてみるなど、みるだけでなく文化財を体感できるロビー展としました。多くの県民の方が訪れ、興味深く見学していただきました。

長野県埋蔵文化財センター)

「縄文人クロ」は、大変な人気でしたヨ!



『夏休み 縄文人になろう』ブースで、縄文土器のクイズを出す「縄文人クロ」県庁ロビーにて(7/29)

埋文ニュース 口縁が二段の壺と北陸地方の影響を受けた壺を発見

長野市桐原地区の浅川扇状地遺跡群^{あさかわせんじょうち}では、方形周溝墓の周溝の一部（南東辺）を調査しました。周溝の幅は1～2.7m、深さ1m程、周溝墓一辺の長さは17.5mありました。周溝内からは口縁が二段になっている特殊な形をした壺が3点出土しました。さらに、実用的とは思われない非常に小さな壺がいくつも出土し、胴部や底部にわざと穴を開けています。これらの特徴から、非日常的な容器として、墓における葬送儀礼^{そうそうぎらい}に用いられた土器の可能性が高いといえそうです。また、これらの土器に混じって、北陸地方の特徴をもつ壺が1点出土し、重要な点は在地の土器のように赤く塗られていることです。北陸地方の壺をそのまま用いるのではなく、地元製作の特徴として赤く塗

りかえて使用しています。方形周溝墓の作られた時期は、弥生時代の最終末、ちょうどヒミコが活躍した頃と考えられます。千曲川流域の墓制のあり方、地域間交流などを考える上で大変貴重な発見となりました。（長野県埋蔵文化財センター）

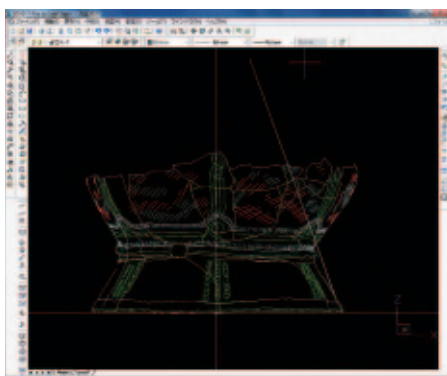


埋文キーワード

じっごく 実測

～土器の文様を描く!～

長野県埋蔵文化財センターの主な仕事を毎号紹介します。今回は、出土土器の記録保存に欠かせない土器の実測をとり上げます。



遺物実測支援システムで素図を作る

土器は時代や地域ごとに独特の形や文様を持つため、出土した遺跡を理解し、報告する際に役立ちます。また、過去の人々にとって調理や貯蔵の道具であるため、表面を丹念に観察することで、作り方や使い方を知ることができます。そこには



土器の輪郭や文様を細かく描く

作った人の工夫の跡や、爪の痕跡までもみえることがあります。土器の持つ情報を読み取り、正確に図化していく実測作業は非常に重要です。

まず土器の輪郭や、表面に施された文様の位置を示した素図を作ります。次に渦巻きや刺突、縄などのいろいろな文様を鉛筆の濃さを変えながら細かく描き込んでいきます。赤彩の範囲や種などの圧痕^{あつこん}の位置も見逃しません。最後に厚さや粘土の接合方法を示した断面図を付けて完成です。出来上がった図は、ペンでトレースし、製作方法や胎土^{たいど}の情報とともに報告書に掲載します。

幕末の姿としてよみがえる上田城跡

上田城は、天正11年（1583）に真田昌幸が築城しました。しかし、関ヶ原合戦に向かう徳川秀忠軍を上田城で足止めしたため、家康の怒りを買って、櫓や石垣、堀などは合戦後にすべて壊されてしまいました。真田氏の後に城主となった仙石忠政は、本丸の7つ櫓や櫓門、石垣、堀などを復興しましたが、明治期になって民間に払い下げられ、西櫓を除く建物や石垣は解体されました。上田城は、本丸と二の丸に土塁や堀などが残ることから、昭和9年に国史跡に指定されました。



明治11年頃の本丸東虎口櫓門（上田市教育委員会所蔵）

和9年に国史跡に指定されました。

平成6年に本丸東虎口櫓門を復元し、戦時中に移築復元された北櫓・南櫓とともに上田城のシンボルとして親しまれています。また、史跡内にある市民会館は今後解体し、一帯を史実に基づき「武者溜り」として整備する計画です。

今後も史跡内や周辺の御屋敷跡等の発掘調査を進め、そのデータに基づき、城郭の構造を体感できるような整備を進めていきたいと考えています。

（上田市教育委員会）



整備・復元した本丸東虎口櫓門

江戸時代の高遠城と全国各地で活躍した高遠石工

戦国大名武田氏の城として知られる高遠城は、戦国的な城郭の構えをとどめている城として、昭和48年に国史跡に指定されていますが、現存する遺構や曲輪の配置は江戸時代のもので、伊那市では現在、幕末の高遠城の姿を目指して史跡整備事業を進めており、廃城後に城外に移された建造物の調査、高遠城内の植生調査、近世に高遠城を描いた絵図の調査、史跡整備に伴う発掘調査成果の検討などを行いました。

近年、伊那市では今まで見過ごされていた「高遠石工」を再評価する動きが高まっています。高



整備・復元した大手門石垣

遠石工とは、江戸時代に高遠藩領内から全国各地に出向いて石造物を造立した職人の総称です。彼らは石仏等を刻んだほか、高度な技術で石垣も築いており、品川台場や龍岡城（佐久市）の石垣の構築も高遠石工によるものだといわれています。彼らのお膝元、高遠城には高石垣こそありませんが、大手門跡に桁形の石垣が残されています。城内の石垣や石造物の製作に高遠石工がどの程度関わっていたのかは、現段階では明らかではありませんが、発掘調査や継続的な史料の掘り起こしを通して、今後考えていかなければならないテーマのひとつです。



守屋貞治作 大聖不動明王
（高遠城跡の南東約2kmにある）

（伊那市教育委員会）



長野市吉田
あさかわせんじょうち
浅川扇状地遺跡群
よしだまちひがし
吉田町東遺跡

2014.7.4～8.12・10.1～11.18 調査
長野市教育委員会

●吉田小学校の解体した体育館の床下から、弥生時代中期2軒、古墳時代後期2軒、平安時代4軒の竪穴住居跡がみつかりました。



北佐久郡立科町山部
あらじょうみね
新城峰遺跡

2014.7.22～2014.11.13 調査
長野県埋蔵文化財センター

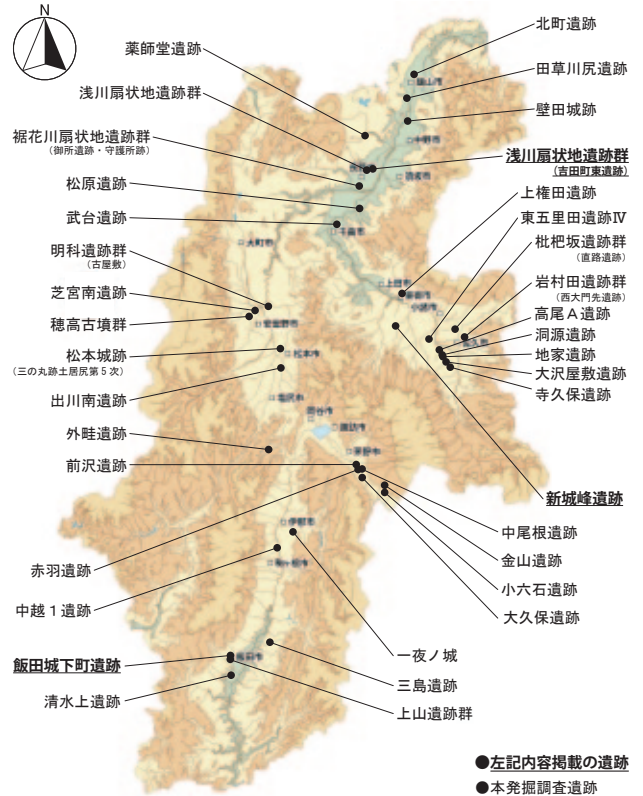
●尾根の頂部から、中世の竪穴建物跡が3軒ならんでみつかりました。出土遺物から、短期間営まれていた集落と考えられます。



飯田市箕瀬町
いだしょうかまち
飯田城下町遺跡

2014.2.25～2014.6.4 調査
飯田市教育委員会

●礎石建物・蔵・井戸・厩・ゴミ穴などで構成された江戸時代の町屋跡がみつかりました。町屋跡は現在の地番に沿うように区画されていました。



●左記内容掲載の遺跡
●本発掘調査遺跡

考古学の窓

～蘇民将来符木簡～

毎年新春の1月7日から8日にかけて、上田市信濃国分寺で八日堂縁日がおこなわれます。大勢の参拝者が訪れ、季節の話題としてテレビなどで報道されます。当日は、木製六角柱でできた蘇民将来符が頒布されます。買い求めた蘇民将来符を無病息災、開運、招福を願って、家の門口や神棚などにまつります。蘇民将来符に書かれた文字は、蘇民将来の子孫であることを意味し、この護符を持つと災難を避けられるという説話に由来します。

蘇民将来符は、現在でも青森県から長崎県まで分布し、蘇民将来信仰としていきづいています。護符は紙製、板製、木製六角柱製、木製八角柱製などと様々です。平成18年（2006）、千曲市八幡の東條遺跡か



現在の蘇民将来符（左）と東條遺跡出土の木簡（右）

ら、墨で書かれた木札（木簡）が出土しました。木簡の大きさは、長さ22.7cm、幅2.8cm、厚さ0.1cm、薄く細長い板で、表面に「蘇民将来子孫人（家）口」、裏面に星（五芒星）が描かれていました。鎌倉時代後半から室町時代頃（13世紀後半から14世紀）の木簡と考えられ、蘇民将来符としては、県内では初めて、かつ最古の出土例となります。

蘇民将来符は調査時点で全国の46遺跡から84点が出土し、最も古い例が京都市長岡京跡出土の木簡で、奈良時代（8世紀頃）の資料です。蘇民将来信仰を具体的に示す木簡の出土は、中部地域はもとより民間信仰の歴史を考えるうえで貴重な発見となったのです。（長野県埋蔵文化財センター）

長野県教育委員会事務局 文化財・生涯学習課
〒380-8570 長野市南長野字幅下692-2
TEL 026-235-7441 FAX 026-235-7493
メール bunsho@pref.nagano.lg.jp

(一財)長野県文化振興事業団 長野県埋蔵文化財センター
〒388-8007 長野市篠ノ井布施高田963-4
TEL 026-293-5926 FAX 026-293-8157
http://naganomai.bun.or.jp/

印刷：奥山印刷工業株式会社